

梅考  
下

文研  
911.34  
Sa48





911.34  
Sa 48



新小治くともむむと治るもあら木更なり  
 治し立てるむむの示教は治る者ハ故人の  
 風雅乃道も名かくのあらく 祖孫中絶後ハ  
 十色子おふるるも後を重きとては治るも  
 今や既に治るるも今や既に治るるも  
 とするにせむるも今や既に治るるも  
 善の極主人は道はよく朝くむとて失ハは  
 今ふとく小治すこと子歎中は執て風雅は  
 大夫妻は操り治るるも今や既に治るるも  
 少むむとく小治すこと子歎中は執て風雅は  
 今ふとく小治すこと子歎中は執て風雅は  
 今ふとく小治すこと子歎中は執て風雅は

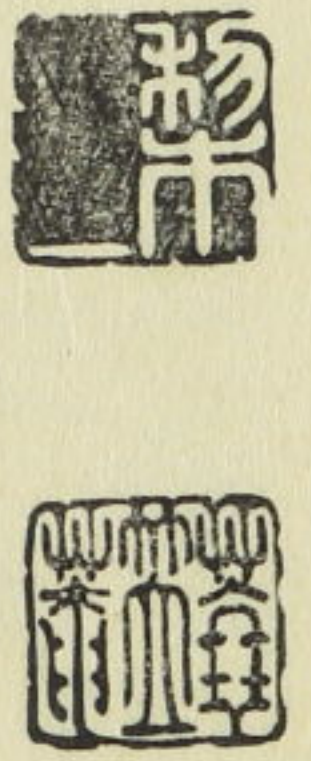
早稲田大学大学院  
 文学研究科図書

45-5134



先生と家の所賦物結士とを俱に在る下  
能門子抱んくさる下仰仰を名ちあるあると  
そと浮川とを流送兄弟のそとみ落るる  
固く控糸糸沙石とややいあや人先は是と  
よろこぶくあぬあ子の下あさるある  
のくいりささぬ

明和七女をーまのきり記さるる  
我あまらとの流生和あーこのくさる



諸国各詠

龜坂の孫

此くろお川は久敷もふさる  
鏡とみは信らみきぬ壘、那  
古畑や夕日我道くさく鶴  
ふ野うすくーを考れあ紫が  
く野うすくあ紫と志くてゆる

洛 隸  
子風  
李完  
素流  
文下



ふさかりふさよむ此を有る記 吾東

綿ふちし何れくへよ軒の雨 周舟

夢の根此下ふゆもあはれ水 紀風

ふし漢や小念の省れなほくさ記 阿麿

何はくもふ橋ふし早舟夜 七峨

木かりやる川くうて路田の橋 青雨

蛇の糸くかき歸る垣あふ木槿 只言

又意し子々入るやうに 毫 参 <sup>女</sup> 琴之

つら鐘の換くまお夕しくれ <sup>尼</sup> 孤抱

幻住庵の古き縁まく

山の井やむし此う乃すみもま <sup>法</sup> 九

棠のふや二階きくたふ夕日ま <sup>法</sup> 厚

夕言あまふ我かきく此まの山 <sup>鞍馬</sup> 一瘤

つあふしあふあすやおしま <sup>湖南</sup> 魯江

啼けし聖の都はよ紺子のま <sup>智</sup> 九

まのくう大工はふまのくうんが <sup>松</sup> 笙



吹のけくふとそりりたるを成が 巨洲

あまおみや早苗成とくるもの中 杜洲

湖東

夕くれや桐のふさむ里をれま 石昌

郭乙あまがせを長ふ巻をけりし 貞柯

うせま鳥人里らうへ入りたり 珠石

何れぞいぬまうへ夏をうらうら 多少

雲々山崎よき

綱引きるあや成何りしや夏の月 十里

短棹の投きり川きや月をうら 舟南

あつらめは門田りきりく水鏡が 吳笠

姫百合の襟をけふ小羽り那 左岸

聲をうててあまそけりあま子か 其引

傾城り扇あやみく暑さぞ 十印

花ふのく川またまのくよとが 珂石

思ふいつるまふそ鳴め葉を蝶 我川



月影下り半まきみんまの清水か

圖杜

海低くまは馬やゆきま

再可

雨の降り衣若袖茂るるれ

紫苔

青き花はひきくまゆきの秋

僧  
玄日

山蝶のすまねきや秋の風

浄基

雪かきに川くれうらきぬとら

南巖

森深き川くうらるる春まが

琶洲

山老のききふりも秋のくれ

貞固

庭くかきみ流るる春まが

浪委  
寸馬

柳ふて水の流るる春まが

播磨  
旧国

郭ふたきや矢越つく雨の中

山李坊

朝来やちひさきなりて後し

布衣

夕やきくくくくくくくく

備前  
孤索

日のまきい合鳥いさきん時雨り

備中  
李夕

七夕やいこれ橋もきくく

兼了



あのかんまの何れも秋の終 備後 古声

あつちやうのふらふら 安芸 凡律

昔河よつてさうさきぬ 周防 青西

昔れとるあつち 長門 秋風

都くもさむと 豊前 杜秋

川舟と火と 我山

堪へやつふ 豊後 棠里

高の所 我山

袂の風のかるはよ 秋前 秋水

登 顔や砂 文推

さうや 肥前 文推

菜のふや 長門 菅城

か 肥後 枕

む 土佐 文曉

き 豊後 菅河

幸 豊後 菅河



稿つる如鮑の飛——水孔身 一峯

おしちくはくろひも外——女弟不 季友

軽沢中棘の夢孔 日南く架 支百

うけぬきく酒や——みん神—— 夏桂

松のことわい——山くも川原系 木野

古寺や庭くはるまの秋ま水 源秀

一二間袋と見えらるあうたが 扇里

春此日く響出かましく白ひれ 伴山

兼さぬや風きくまのと成より 石見 隼鼓

波くく響か葉の色や高叶而 伊賀 桐雨

雪のまといちふるぬ漆、那 伊勢 麦岐

柳ふも木くもはは林の風 樺良

義賣くいさ海呑ん春孔雪 入楚

鳥近ちまきぬ便りおいのあり 如之

年よれハ隣もき記すぬさぶ 二日坊

春而如白の月く九片ち我の里 尾張 吟山



何となく二舟小なり柳り那後河乙兒

うらふの陰小河はき清水り那江戸秋瓜

あふたると任人何となく人こき卷河

来ニ懐危り一似今に帰田葛太

山嶽を吃けりは。何となく昭馬

今年の新ふとほふとや神をきか

冬されや能事の左もるる能膏澤人

携立錢引きるり一妹の命水戸 三日坊

待とぬ友の侍り月夜り那南部 煮郷

ふあおりの白ひ我押流仙臺 栗森

北ぬくりりりものを語令津軽 里桂

月もいふとらり出る上野 西村

月もいふとらり出る上野 西村

月もいふとらり出る上野 西村

月もいふとらり出る上野 西村

月もいふとらり出る上野 西村

月もいふとらり出る上野 西村



りくく此景花あえく種々那 女 哥川

みもりぬ春のぬ人うきうき 子丸

初 誠後 柳葉きき 町波

春れや、沈ふをうきく木葉帯 恭電

起るまに、嘘となりあり時多 鷺大

此まもりの物とあいもん水の影 一音

字くまのあ一をく一渾の春 能登 文洞

岩つふ水のひきあや昔死ふ 昌浪

暖くふち影運あ月見が 大明

新鳥如ふ河と起るる影あふ 見推

岩まけり葉つてもうくさ紫ふ 越中富山 馬角

畑くちも一木多しむも接ぐれ 玉谷

仙人死まきく青く春の雨 万吏

傘一の車空とくや本とまは 夫扇

梅子如月のもれはもぬ咲所 巳千

萍死つまゆく水とぬ小くり 明至



十六夜や黒木の鳥居越くかす 杜川

新く水やうき傳く人死にまの才 湖帆

手嫌の何うかしくみくく生海嵐が 竺千

星の事やゆきう出さふ 渡舟橋 枝原

笑死戸う夜の加さうやあくの香 其朝

暖も夕暮もすたなく 扇帳ふが 墨花

室も氷て雪死を解や夏の心 澗川 知十

雪のかくれ家ふく 夏木を 栢茂

縁く死雪はさうやりの不 木竹

さのふき掃気色の上さひさうが 生地 百合

雪のなみ山と暮るは 初さみさ 琴水

月ふさぐ暮の朝り花覚らき 春登

かきみりり交もあさう 漱死音 居来

うハりりや足死下り橋さうら 設菴

怒陽ふや人うむうひて 咲かきり 斗間

舟のうへ枝さきくさう 田植が 芦代



岸也 魁と志川む 峯此月 一風  
 夕蟬の音もたのまぬ 命の都 入楚  
 後くハ 雨もはもろ 一葉もれ 可扶  
 初冬風のせきく 海もや 松の音 子樵  
 草猪の人 或何つ 免る 入り都 即就  
 及之ー 水々夕日や 神むえん 子訓  
 き川の紫小 数何の 中のちとろりぶ 羞丸  
 赤小此を 夢ささく くる 夢の夢 鍾子

浦のまゝー 紫小 柳の 或侍えく

塩煮もく かつ 鮎も 宥の せきさぶ 大悉  
 埋まや 夕くれの ま 鮎の 旬 見凡  
 外 垣も 又ささく くる 夢の 夢 珂后  
 色貝の 殼も 入らく 田螺もれ 拵系  
 枕 嘆も 新し 心道 吉い 又ち 李仙  
 海はく 孔も 入ら くる 次 系 翠  
 心 根も すれ 或 如り くる 今年 休 文士



くろひる孔備もさるや令歡の糸 岩原

下あろろ何くても由小門まき 梅走

夕暮お省明神く一色孔空 芦船

芋の紫孔空るけりや膏の面 可泉

心よう鳴る何れや秋孔蝶 朱弦

孔空ちきくお水の美むすひ 共六

家うく何き月よまきく枯舟が 夕吾

一葉く一書何つ使くろ午きが 西笑

物着孔ちくく笑ゆるきささ 乙葉

神てくお春の海色哉忘し海を 本吉 亀選

松系お雪孔ま山只きく川 小雲 野冬

とくも啼鳥も何くハ内あふ 佛仙

畑中の桑く掛くろ袷く那 若奴 既白

儒るくく言る 菱葉の日何川 大聖寺 八水

空日よ死了果材の田歩く乳 紫狐



うゑのまの二葉とらう甲梢、那 金塚 羨床

山新や煙杉ひと、梨此不 蓬外

鏡とく小田く、濁まる朝白ぶ 壺友

雪多此と川着流と、小枝れ 小々雄

ちと流るよゆ哉す、と此糸桜 巴溪

松の色春と、清未此白ひれ 廿十

く多ひす此踏志、やうと如苔清水 庐峯

系なくく、鳴とあ、如青阿卜 返辺 筆屋

梅子やま、と片喜の鶺鴒石 文推

海身ひらふ人の昔と、やう阿不船 舟嘉

嘘つき、と一葵して、のまをて此川 尼 珈涼

寂し此如隠子阿、帯とと秋の風 太良

日和も松の阿、とや秋路山 蛙井

明や木の紫此、家乃姿以道 枝惜

勢多此尾と、吹く水と、ちと、うか 嵐軒

透る水く、風と、もく、朝の二葉が 吳々



あゝ——如松平ひく冬忘れ来 沙路

冬の紫花気ま小ち如龍田川 夏雲

氷るあ如早孔たう時 新うらや 歌曲

何事りやわねの 子る孔あ何ふ 李下

そも此集の名は梅にさる家と名付るを  
 祖翁の梅うら春一句と一集の本意とあてよわよ  
 毒花句成哉さるを——その如杜の凌う海棠の待た  
 ぬはらりまあ——如早 權若後川を加てあふ乃  
 春に——若柳令の子と——と俳諧の血脈まを  
 つ——るあよより名譽何うあ如園は京道の人よ  
 かまはへらま——と俳諧の——是は花鳥の情成すく  
 るはまへんをそとそへ此のふをふ心成るやまし家



産とやうくそふるもれ男のくお名の立や志は  
 されと力十とよ半の宗よや隆とむしむるは  
 へんくう佳事成とて好まよう中くむ神庵を主  
 ありの飛障と懺悔一髪と刺くは序のあうへん  
 へんへん 俊宗先僧の住る法勝寺に流るるかき  
 このまみ戸者るに物とて 松の家サ人んを死  
 せうしうれ懐古のゆ成のゆりてようしうれその外致  
 乃くくする住居たれハ常に五七五の句をたしてハ

芭蕉翁の風物成者といひ一柱の姿をまうてハ  
 宗祇法師の風流くまうて行ひす海くく  
 々お宵折成者のふへくまうてらんをま  
 残のねく僧能受あし



京橋店様

五



